

徳泉寺報

No.005

発行
平成30年3月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区
榴岡3-10-3

(022) 297-4248

日いちにちと春に近づき、境内の花々のつぼみも膨らんできました。このお便りが届くころには春のお彼岸も過ぎて、暖かい日差しに胸を弾ませる方も多いのではないのでしょうか。

わす な か 忘れ る こ と 勿 れ

三月十一日、東日本大震災の追悼法要を勤修いたしました。

「あの日、何をしていましたか。」

そう尋ねると、どの人にも、あの時の記憶がはつきりと残っているのを感じます。その人その人に、震災時の出来事があり、思いがあり、震災の前と後ではつきりと区別できるような心や環境の変化があったりと、あの大きな自然災害が私たちに残した影響の大きさは計り知れないものだと、改めて思われます。

徳泉寺ではあの日、住職夫妻が福島へ出掛けており、副住職（現住職）夫妻に三歳の末娘、九十二歳の前坊守が在宅中でした。大きすぎる揺れに足がすくみ、どうしたらいいのか、とっさに頭が真っ白になった感覚をいまでもはつきりと覚えています。お彼岸前で清掃業者の



方も十人ほど作業されており、瓦が崩れ、墓石や灯籠が落ちる中を慌てて帰宅していただきました。

余震の続く中、とりあえず幼い子どもと前坊守の安全を第一に考え、損壊の見られなかった本堂に避難することに。その後、ご門徒さんや近所の方などとも声を掛け合ってラジオとランタンの明かりのなか、そこにいるみんなが不安な夜を過ごしました。

失って初めて分かることは常ですが、電気、ガス、水道にどれほど頼り切った生活をしているのか、自分がどれほど何もできない存在なのかをいやというほど思い知らされました。嘘だったらしいのに、と思うような辛い知らせもたくさんありました。

しかし、そんな中で、何が一番大切なのか、どちらを向いて生きていけばいいのかがはつきりしたような気がします。

長い時間並んで買った食べ物を分けてくださる方。お墓を心配して駆けつけられた方。なかには、お寺の瓦が損壊しているのを見て、わざわざ泉区実沢の瓦屋さんまでバスを乗り継ぎ最後は徒歩で、瓦の修繕をお願いしに足を運んでくださった方までありました。

そうした人の温かさに触れ、大事なものをお預かりしていることがはつきりすると、自然と足元が定まって、今あるご縁を大切に生きていかなければと思えるようになりました。もやもやとしていた不安や不満がスツとなくなつて心の中がシンプルになったように思います。

当時三歳だった末娘も六年生になります。

学校での震災学習の折、先生が「この学年が震災の記憶がある最後の学年です。」とおっしゃいました。

「忘れること勿れ」

周りの方たち、後世の方たちに、あの時の経験を語っていかれたらと思います。



勿忘の鐘を撞く